母親支え院内報200号

仙台の小児科 発行続け17年

感謝の声続々 来月記念誌

仙台市青葉区の小児科医院「かわむらこどもクリニック」で、母親に向けて発行している院内報が200号を迎えた。ほとんど休まずに発行を続けて17年。診療の合間を縫って執筆、編集にあたってきた院長の川村和久さん(58)に、母親たちから感謝の声が寄せられている。

院内報はA4判で、原則として表裏の2ページ。休日や診療後に、川村さんが執筆、編集している。

表は川村さんのコラム、裏は母親らの投稿を中心に構成する。流行中の病気の解説を中心に旅行記や学会報告など、コラムのテーマは幅広い。

記念の200号は12ページからなる特集号。「すばらしい功績」「たくさんの情報を毎月ありがとうございます」などと、母親ら36人が祝いの投稿を寄せた。4月には101～200号をまとめた記念誌を発行する予定だ。

3年前から2人の子どもを診察してもらっている主婦高倉千恵子さん(38)=青葉区=は「院内報を読んで、どういう時に病院に連れて行けばいいかが分かった。先生の人柄も伝わり、親しみを感じる」と言う。

第1号は開院3カ月後の1993年6月に発刊した。以来、休刊したのは、川村さんが病気で入院した1回だけという。

「忙しくてやめようと思ったことが何度もあった。『安心した』『参考になった』という反応が励みになって、続けてこれた」と川村さんは感慨深げに語る。

院内報は待合室に掲示しているほか、通院で訪れた母親にスタッフが直接、手渡している。クリニックのホームページにも掲載している。

川村さんは「診療時間内にお母さんたちに伝えられることは限られている。これからも、正しい情報を提供し、育児や子どもの病気を心配する母親たちの不安を解消したい」と話している。

かわむらこどもクリニックの院内報。発行から200号を迎えた